

古代アジアを論証する(1/2)

平成 24 年度定期総会 記念講演

平成 24 年 5 月 27 日 (岡山)蓮昌寺にて

日本先史古代研究会会員 矢吹壽年

(一)講演に先立って=自己紹介を兼ねて私と歴史の関わりを話します

矢吹壽年と申します。生まれは1940年、昭和15年で皇紀2600年の年であります。小学校に上がる前昭和 20 年(6/29)の岡山大空襲を覚えています。夜半起こされて縁側に敷き布団を頭から被り(敷き布団は弾を通しにくいとの知識があったようです)兄と二人矢坂山の黒い影の向こうが赤く燃える空に、津島の高射砲陣地からの応射は、時折探照灯に光るB29には届かず、子供心に悔しかったことを覚えています。バリバリと放出される焼夷弾は昔見た花火のようでした。それを口にすると父に「家を焼き出されている人もいるのでそのようなことは言うものではない」と窘(たしな)められました。「もし我が家に降って来たら後ろを見ずに前の田圃に駆け込め」と父に言われました。5歳になる年の事件ですが、以後毎年その頃になると我が家では話題になりましたから良く覚えています。

小学校に上がる前に入学準備でカタ仮名の読み書きが出来ましたが、私たちの入学から教育カリキュラムが変りひら仮名の教育となり、新仮名づかいと新しい漢字での授業となりました。兄弟の読む本は何でも読ましてもらっていましたが旧仮名遣いも順応できました。70の手習いで古文書解説講座に通いましたがここでも有利でした。

今から8年前に不摂生の為、脳内出血を患い半身不随となり左右で体温が異なり、記憶力の減退、意欲の後退、失語症で名詞や形容詞が出てきませんので、吉備中山を守る会、観光ボランティアの皆さんにも奉仕を遠慮していましたが、山崎さんの口説きで一辺恥をかけということで冥土の土産に今日は根性を据えて話します。ということで作って来た原稿を読むことをお許し下さい。

(二)戦前戦後の歴史観

歴史時代も同様ですが特に古代史や考古学は第一次世界大戦後に米英仏露等の大国に肩を並べた大日本帝国と云う大国としての面子(めんつ)、強大な一等国日本と云う国粹主義を基底とした皇国史観に裏打ちされた、今考えると小説風の歴史が、第2次世界大戦の敗戦によって、革新的な新制大学出身の学者による自由民主の思想の基に、西洋哲学の肯定と東洋哲学を否定し、新しく日本の歴史を教育するための社会科の教科書作りと教育カリキュラムが選定されたのであります。これらはGHQの意向に添った自発的選定でありました。

2歳上の兄の教科書は裁断前の一枚ものでした。母はそれをページ毎に切って糸で縫いました。小学校四年生で古墳を学びました。先生が黒板に書いた前方後円墳の姿を見たとき「それは尾上の山の端にある」(車山古墳)と口走ったのですが、先生は車山古墳のことを知らなかったようです。後期の横穴古墳は住居址と教えられ「天井に煤がついとるじゃろ」と説明され、その頃はルンペンが無断宿泊した跡でした。小学2年生の夏休みに隣の小学校で開かれていた郷土の歴史教室に参加していたのです。その時の講師の一人が中仙道の佐藤勲先生で、後に中山中学校へ赴任してきます。佐藤先生は催眠術の出来る人でした。

高校は岡山工業高校で当時東古松に校舎がありました。隣から時折フォルマリンの臭いがします。岡山大学医学部の人類学教室には近藤義郎先生が講師で居りました。同好の同級生と人文地理教師の池上

憲明先生を顧問に考古学研究会を発足し、次の年度からは部活動補助金も頂けるようになりました。部長が近藤先生の所で特別講義を受けて部員に伝え、部員は小林行雄さんの「日本考古学概説」で自習。相互に疑問をたたかわせながら習得していきました。春休み夏休みは北区高松の立田の友人宅を根拠地に分布調査を行い、自宅から米や野菜を持ち寄り、若干の費用を拠出して頑張りました。成果は高校生同志の集いで報告し得意になったものです。蛙ヶ鼻の壺棺墓の発掘を手伝い、堂山古墳発掘の端緒となりましたがその時は卒業していました。

私は卒業と同時に愛知県瀬戸市の会社へ就職しましたが、その時の同僚に足立さんという人が居て、その足立さんの実家の敷地に古い窯跡が有って黄瀬戸の色、形を自分のものとする事が出来ました。当時永仁の壺がニュースになっていました(加藤陶九郎)。約半年で父の病気入院で岡山に帰り、兄の農業を手伝うこととなります。約8反の田圃の世話、2反の藺草の収穫などがあり兄一人では不可能であったからです。その後県内・市内でアルバイトで過ごしましたが、永続する就職を誘ってくれる町内の方が居て農協へ就職しましたが、そこで私が十二指腸潰瘍で手術となり、手術後は以前のような過酷な労働は無理と悟り、町役場を受験、無事採用になりました。この時の課題に「我が郷土」についてのレポートを求められ、私は縄文・弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉と郷土一宮の遺跡・名所・旧跡についてぎっしり書き込みました。そのレポートにより教育委員会に配属され、社会教育として当時流行していた「一宮歩く会」を企画し実施することになり、好評を得ましたが、そのうち道すがら各地の事柄や由緒を説明することになり、自分自身も岩津政右門先生や市川俊介さんの講座へ顔を出し、古代吉備国を語る会へも参加し、話法や話す順序や歴史の考え方などの研究をし、地方史研究協議会編の「地方史研究必携」で「地方史の研究」を独習しました。

当時一宮町へも開発の波が押し寄せて来て遺跡の破壊や土取り等による古墳の破壊が始まり黒住秀雄さん等の破壊阻止追及に町教委の担当として、保護・保存と開発の板ばさみになっていました。とにかく文化財の破壊はニュースになるものですから新聞記者を連れてきて、青筋をたてて怒鳴るんですが、歴史の話は役場内では私しか対応できなくて、次の日は知らぬ顔をして、別の話題を持って私のところに来ていました。未発表の遺跡や文化財を見つけてきて新聞に載せるのが趣味のようになりました。私も負けずに休日返上で町内を廻るようになりましたが、黒住さんには敵(かな)いませんでした。

岡山県教委による備前地区文化財担当者研修にも参加し岩津先生・藤井駿先生・市川俊介先生とも顔なじみになりました。辛川天神山七つ塚の発掘には県と鎌木先生を繋(つな)ぎました。昭和46年の合併により岡山市教育委員会へ配属され、この頃吉備津彦神社の御田植神事を、県指定無形文化財にという機運が高まり記録保存が行われることになり、黒住氏は拒まれたのですが私と岸統(きしおさむ)氏が地元関係者に選ばれ、私が吉備津彦神社の歴史を担当することになりました。以下は報告書を昭和54年に発行していますので略しますがこの時、山の形と古代の神社仏閣は関わりがあるぞと認識したのです。これは古代吉備国を語る会の30周年記念誌「吉備されど吉備」に岡山県内に私が見付けた27箇所を紹介しています。

奈良東大寺の正倉院御物と同一と云われる「奈良三彩」陶片を発見したのもこの頃でした。吉備津宮境内古絵図にある神力寺の本堂辺りの現在菜園となっている所を通りかかった時、趣味の楽焼の破片かと思ったのですが手にとって見ると下地の布目が気になって、黒住さんに見せた所、名古屋大学の檜崎先生に連絡をとって調査を依頼しました。昭和48年発行された陶磁器大系五巻に載っています。

(三)朝鮮半島との歴史観

そんな黒住さんと朝鮮に探検旅行の話が持ち上がってその気になったのですが、黒住さんの親族が全

羅南道木浦で47棟の蔵を持つほどの大地主で、関係者が訪れたら報復すると云う噂に、途中止めとなりました。私が最初に韓国旅行に行ったのは、かみさんと7年前になります。ソウル観光でした。最後の半日、国立博物館を見学しました。和文の説明が少なくこれには失望しましたが、展示物の質と量にはさすがと感心しました。金達寿や李進熙の吹聴していた古代朝鮮は「倭」より文化が高く古墳から出土する遺物は先進地朝鮮から文化を伝達してやったんだと放言して、それを又、上田正昭氏が神輿をかつぐもんだから、大いに誤解していました。

岡山空港から北に飛んだジェットは米子を過ぎて西北へ一直線に仁川空港を目指します。大白山を過ぎた頃から目の下には、山と川と高速道路のほかには条里の遺構等田圃は全く見えず高い文化で豊かな国ではなく、大中国と倭寇による略奪と収奪による苦難な国「朝鮮」だったと思うようになりました。

「三国史記」(さんごくしき=韓国の日本書紀と称されている)と云う本が岩波文庫から出版されていて、日本の古事記日本書紀より新しい1145年に書かれた撰本ですが、これに紀元前50年に赫居世(かくこせ)王(百濟)8年の条に、倭人兵をつらねて辺を犯そうとする記事が見えます。「赫」姓は中国五胡十六国にも大夏国王(407~431)の姓となっています。同じく「三国遺事」と言う本は13世紀に一然と云う僧による私撰があります。両方とも新羅国の古記録から採用したようですが、現在は原本が確認されていないため不明で、両方の記録に共通しないものが多い。と言う事で問題もあるものの、他に史料が無いため用いますがこの「三国遺事」にも「紀元479年倭国の兵来たり、侵略す」とあります。(少なくともこの来寇は海賊とは異なると意識すべきです)

現在日本では前方後円墳出土のほとんど全ての副葬品が天皇又は倭王からの下賜品を副葬したと推定するのが通例ですが、私は韓国征伐を主宰する地域の豪族から呼び掛けられて、桃太郎の鬼退治の、犬・猿・雉のように追隨して出征し、無事帰還してきた者が古墳築造の権利を与えられ、その子孫はそれぞれの地方の名族として君臨することが出来たと考えたのであります。各々葬礼に当って当時でも高価な太刀・豪華な装飾品、珍しい馬具、日本で着用する事が証明されていない。貴族が着用する衣装の帯止めのバックルなど、市場へ出せば相応な値で取引できる品々を副葬することなどは理解できない私です。被葬者が事ある毎に「手柄話」で語り、同じものは各々相続し、残った者達が冥土まで持たせようと話し合った結果の副葬ではないでしょうか。それ位朝鮮への船出は利益があったと思っています。朝鮮だけでなく台湾から南へも行っている可能性が多いと考えています。彼等は商売(貿易)も兼ねていたのです。それと考古学は総合科学で究明する態度・姿勢が必要と考えています。あらゆる分野からの意見集約が必要です。

(四)オリエントと風水思想

私は過去6回岡山市の洛陽会(岡山市職員で構成)から中国へ訪問して現地で遺跡を見、考えましたが、中国に於いても形の良い山、たとえば「嵩山(すうざん=道教五大名山の一つ)」には達磨大師の少林寺(ここは風水福地です)、儒教の「院」や道教の「観」が複数残っています。文化は高い所から低い所へと「水」の流れのように移って行くと言う考えがあります。一つの考え方としては誤りではありませんが、遣隋使以前の日本に何故風水が存在するのか。弥生時代はおろか縄文時代に遡るのは何故かについての疑問が残ります。私の意見は約3万年~1 万年前まで「ウルム氷河期」が起こり多量の水分が雪氷として陸上に堆積し、そのために海水が百メートルから二百メートル近く下がったために、北海道と北九州に於いて大陸と陸続きになり(日本海は殆ど陸地で当時東北は、現在ほど雪は多くなかった)これを通路として中・新石器人=東胡族(ツングース)が到来するが彼等の持っていたオリエント哲学とも云うべき文化ではないのか。

中国に於いて儒教・老荘学・道教と発展した。これらオリエント哲学が日本に於いてもある程度進化していて遣隋使たちが中国の最先端のこれらの文化に遭遇してもカルチャーショックを受けることが無かったばかり

りか、乾いた土が水分を吸い込むように全てを理解する「IQ」を持っていたのではないかと考えています。

最近の考古学の全書でも縄文遺跡周辺の環境的な位置などの報告にも、これを伺わせる記録が見え出したように思います。食を得る為の特別な場合を除き、現在でも住居を選ぶ条件で、風の当らぬ、日の当る、良質な水を得る環境が大切です。水の浸さぬ高さで、私は形の良い誰でもが認識できる環境景地の近くに遺跡は多いのです。これはそれ以降に、古代神社仏閣の建築される所でもあります。明治神道では神社境内は神聖な地で墓に類する古墳は、有名な神社の境内には存在しないといつて来ましたが、備前備中の吉備津神社には古墳が存在します。こう云う所を中国では風水福地と言い習わしてきて居ります。

現在では中国を中心とするオリエントの見方と私は言っていますが、南アフリカの南端から6万年前に北を目指したホモサピエンスの古郷であるケープタウンの良港の背後には、東洋の風水に共通する形の良い山(ケープ富士)が存在し、後の航海の目標点となっている事実があります。ひょっとすると世界通用なのかも考えたりしています。

(五)中国大陸との歴史観

それでは中国文明について述べてみたいと思います。言葉としての中国文明の「文明」とは人知が進んで世の中が開け精神的、物質的に暮らしが豊かになった状態、特に宗教・道徳・学問・芸術等の精神的な文化に対して技術・機械の発達や社会制度などによる経済的・物質的文化を指します。「文化」とは人間の生活様式の全体、人類が自らの手で築き上げてきた有形無形の成果の総体、それぞれの民族・地域・社会に固有の文化があり学習によって伝習されると共に相互の交流によって発展して来ました。カルチャー＝文化のうち特に哲学・芸術・科学・宗教などの精神的活動およびその所産、物質的な所産は文明と呼び文化とは区別されます。また文化とは世の中が開けて便利になる、生活内容の高まる文明開化のこと。多くの語りの前に付き新式・モダン・便利なことを指します。

考古学はこのような文明・文化の遺跡を発掘調査して、その時代を解明するのに、現在の風水も神仙道も知らない考古学者の発掘、或は警察の鑑識のような方法で良いのであろうかと私は疑問に思っています。古代人の持っていた思想・哲学・風習はどのように発掘報告に加味すれば良いのか。古墳を造った人達がどのような哲学を持っていたのか、誰が考えるのか？。文明の定義のうち諸文化について説明の不足があります。国防のための軍備と武器・兵法が書かれてなかったのです。これが戦後の学者の考えの足りない部分と考えています。軍備と武器は重要な国策でありまして、吉備真備の2度の入唐に際しても兵法以外は持ち帰ることが不可能でした。

世界の四大文明と云えばエジプト文明・メソポタミア文明・インド文明・中国文明であり、それぞれ大河によって育まれています。文明史はまた数学史でもあります。中国2000年前の河図洛書(らくしよ)には世界初の魔法陣が示してあります。各文明は他の文明と交通・通商することで経済を発展させています。

魔法陣＝古代のナンクロとも云えます。1～9の数字を1つずつをもちい、縦・横・斜めに同じ数を並べます。

左から2・9・4 その下の行に7・5・3 その下に6・1・8 とすれば答えはそれぞれ15となります。

どの位、高度な数学であるかは別として、最初に示された数学的文化の一端です。

アジア・西アジアを含めると三代文明はアジアから生まれていると言えると思います。ほとんどが氷河を水源とする大河でした。

中国文明とは何か。中国文明を一般的に云えば「中国は漢民族が担い5000年(6000年とも)の歴史を持ち世界文明の中心＝中華思想で繁栄してきた」と言うことになりませんが、また人類の部族の移動の面から考えると中国は母系の農耕文化を持つ原中国人・トルコ族・南方モンゴロイド族が1:2の土着族と支配層として新モンゴロイド・トルコ族・モンゴル族・ツングース族の民俗集合体であり、新モンゴロイド間の覇権争

いの歴史であったと言えます。歴代の国王のうち漢民族の王は「漢・唐・明」ぐらいで、あとは胡(えびす)であったのです。

中国の初期農耕文化の担い手は原中国人でした。6万年まえに南アフリカを出発し北上。4万年前頃に到着したホモサピエンスが繁殖した楽園がスダランドと呼ばれる土地(タイ中央を流れるシャカオプラー川が氷河期に形成した広大な沖積平野)で現在ではタイランド湾から南シナ海へかけての海底に没してしまいました。

海中に古代の川を発見したエピソード

大正時代に海図作成のため、ヨーロッパ人が測量作図をしたところ、等深線で河川状の地形が表れたため、かつて陸であったと確認された。水は水中では河道を抉(えぐ)ることは無く、等深線で川が確認できれば、水面上の時期を示すのがご理解できるでしょうか。

マレー半島東海からインドシナ半島に接する大陸棚で紀元前7万年旧石器時代のころから紀元前1万4000年の中・新石器時代の頃にかけての氷河期には陸地であった。広大なスダランドはアジア民俗の故郷で、紀元前5万年頃から一部が陸地伝いに北上し(気候環境の変化が大きな原因です)モンゴル(バイカル湖付近)やシベリヤにまで広がり混血のマンモスハンターになったのです。日本にも来た縄文人と共通しています。彼等は徐々に寒さにも適応して北方系アジア民族になったのです。一部は海洋民俗として太平洋に広がりました船を使わずに移住しています。

一部の人々はスダランドと陸続きになっていたジャワ島やバリ島からオセアニアに移住しました。オセアニアにもオーストラリアの間に海面下に沈んだ平野があり、サフルランドと呼ばれています。同様に同じ時期、世界には数ヶ所同じような草原があつてこのスダランド発の住民と海洋民が移動して原中国人となり、水耕稲作を始めて、母系の農耕文化を开花させますが、次第にモンゴル高原(草食動物遊牧民)の新モンゴロイドが南下して文化的影響を与えるようになります。8500～9000年前に長江下流域で彭頭山(ほうとうざん)文化(縄目模様の土器を持つ)で、稲の栽培(住民が栽培を意識し栽培を始める)が伝わり、河姆渡(かぼと)文化、大溪文化(7000～5200年)(環濠集落を持つ)に繋がり黄河中流域で粟の耕作や豚の飼育を中心に斐李岡文化、及び後李文化が登場し仰招(ぎょうしょう)文化(5000年前)トルコ文化から**青銅器**(注参照)文化(5500年前)この時代、新モンゴロイド(トルコ系・モンゴル族ツングース族も放牧を営んでいた)河姆渡文化は8000年も前から西アジアの文化の影響を受けていました。農耕は1万年前に西アジアで起源があつたとされています。牧畜もほぼ同時期であり、遊牧はそれよりやや遅れるが牧畜の延長として発生しました。遊牧はテントを持って移動します。牛や馬ロバの背に負わせて行きます。鉄を人類が知ると先ず一番に使用したのは武器ではなく発火具と私は考えています。遊牧に必要なのです。

青銅器 金(かね)に方向を与えます。青龍・朱雀・白虎・玄武は東南西北となります。錫はあおがねと呼び銅はあかがね、銀はしろがね、鉄はくろがねで中央は黄金(真金=まがね)となります。銅は純銅ですと軟らかく錫と混ぜることで硬さを増します。それで青銅と名づけました。 編者・・・納得

中国と西アジアは4000キロ以上離れていますが、間にヒマラヤを挟み非常に隔離感がありますが、この二つの文化圏は古代から密接に繋がっていました。およそ8000年前から始まっているとされ、その地域は黄河地域に限定されていて、おそらくは粟や麦の農耕により定住する民が現れた頃と時期を同じくするようです。黄河流域は、1万年以上昔は比較的温暖で雨量も多く旧石器の遺跡が多数発見されています。さらにその住居の歴史は20万年以前の原人の頃から確認されており、森林地帯で狩猟採取に適した地域でありました。しかし黄河地域での遺跡は1万年前を最後に 2～3000年間発見されていないのです。その理由は気候変動と同時に黄砂が降り続いて砂漠化し、人も動物も植物も生存できない環境に変化したためとされています。しかし、黄砂の特徴である砂と粘土の間のシルト層(碎屑物・粘土と砂の中間の砂土)土壌

